

## 令和2年度 第1回沼田市市民構想会議の概要について

1 日 時 令和2年7月1日（水）午後2時から午後4時

2 場 所 沼田市役所 第2委員会室（テラス沼田5階）

### 3 出席者

(1) 委員 片桐徹憲委員、小野要二委員、井上滋光委員、小林昭紀委員、  
生方秀二委員、岡嶋稜子委員、小野里順子委員、田辺祐己委員、  
六本木勇治委員、林康夫委員、小林好委員、鈴木誠委員、  
武井義明委員、坂井隆委員、小池大介委員 (15名)

(2) アドバイザー 篠田 暢之氏

(3) 沼田市 横山市長、五十嵐副市長、川方総務部長  
(事務局：矢代企画政策課長、生方政策推進係長、清水副主幹)

### 4 配付資料

- ・ 次第
- ・ 委員名簿
- ・ 沼田市市民構想会議設置要綱
- ・ アドバイザープロフィール
- ・ 令和元年度 第8回沼田市市民構想会議の概要について
- ・ (資料1) 令和元年度市民構想会議の検討経過
- ・ (資料2) 令和2年度市民構想会議の運営について
- ・ (資料3) 市民構想会議の運営に関する基本ルール
- ・ (資料4) 第2期沼田市まち・ひと・しごと創生総合戦略

### 5 概 要

(1) 開 会 (事務局：企画政策課長)

(2) 委嘱状交付

- ・ 横山市長から新委員へ委嘱状を交付した。

(3) あいさつ

<横山市長>

この市民構想会議は、本市の将来のまちづくりのための意見を幅広い層の皆

さんから伺い、市政へ反映させるために設置しており、委員の皆さんの忌憚のない意見をお聞かせいただき、市政運営にいかしていきたい。

<生方会長>

新型コロナウイルスに注意いただきたい。

#### (4) 自己紹介

各委員からの自己紹介後に、アドバイザーから自己紹介を兼ねてあいさつをいただいた。

<アドバイザーあいさつ概要>

市民構想会議のアドバイザーとして、今年で6年目を迎えました。沼田市とのご縁は日本青年会所の街づくり講師として伺ったのを機縁に、今年で29年が経過しました。その間、講演会やセミナー講師を通じて当地にも多くのご縁を頂いてきました。

市民構想会議は市民の皆さんが未来に向けてより良い沼田づくりの議論を進めるためのものと理解しております。街づくりは行政によって進められるものという理解が大勢でした。しかし未来の街を作る主人公は、本日ご同席の委員の皆様方をはじめ、ここに住み生活を営む市民の皆さんの合意形成が基本との考えから、この構想会議が始められたと理解しております。

右肩上がりの社会から右肩下がりの社会へと日本は社会環境が変化する中で、少子高齢化が現実となっています。こうした変化は委員の皆さんも日々の生活を通して実感されていると思います。この会議は皆さんの忌憚のないご意見によって、沼田市の未来の街づくりに活かせる知恵を集め議論する場として期待されています。宜しくお願い致します。

#### (5) 議 題

##### 1) 市民構想会議の運営について

市民構想会議の概要説明（事務局：企画政策課長）

- ・要綱により、市民構想会議の趣旨や任務等を説明
- ・資料1により、令和元年度の市民構想会議の検討経過を説明
- ・資料2により、令和2年度市民構想会議の運営について説明
- ・資料3により、会議運営の基本ルールについて説明
- ・資料4により、第2期沼田市まち・ひと・しごと創生総合戦略について説明

<アドバイザーからの意見>

新型コロナウイルスの感染拡大被害は3点において、これからの社会の方向性を示す要件を示唆しています。その要件は未来の沼田市の街づくりを考える

上で、ヒントにもなると考えます。

1点目は、命の大切さや生きる意味や働く意味を考えるようになりました。命を尊重する視点から、人として生きていく在り方を考えさせられ、人と人との関係性についても今まで以上に考えられるようになりました。東京一極集中の生活に疑問を抱き、空間的にもゆとりがあり、水も空気も清浄な地域で命を大切に、楽しく暮らす意味が再評価されるようになりました。

2つ目は、自粛要請から、家族を基本とする暮らしの意味を誰もが考えるようになった事です。最小単位の家族という生活を通して、私たちが一人では生きていけない存在であることを、誰もが従来よりも強く自覚するようになり、暮らしの在り方を決めるその基礎に政治があると自覚された事です。

3点目は、3密回避や社会的距離の確保問題から、リモートワークの仕事の合理化や効率化が急速に理解され、従来の仕事の進め方を離れて多様な生き方の可能性を多くの人々が考える機会を得た事です。働く場所に制限されない働き方が可能であり生活できると実感し、働き方の再発見ができたのです。

このように、コロナ禍がもたらした3点の意味は、従来の生き方の価値判断を変える契機を生みました。その結果これまでデメリットと考えられてきた条件が、むしろメリット、長所になると再確認され始めたのです。このような見方に立って、沼田市に眼を向ければ、プラスに転じられる好条件が揃っている事が分かります。

沼田市は勿論のこと、市民構想会議にも千載一遇の好機を活かせる時がきたのです。そのためには未来の沼田市の着地点となる目標設定が極めて重要な事となりました。コロナによって気づかされたこれまでの偏りを元に戻せる機会と考えられるのです。

日本の総人口の10%近い人々が東京に集中して生活する生き方への反省は、私たちの生き方の問題を通して、地域再生の好機となるチャンスです。

#### <意見交換>

- 今回のコロナで地方が見直される契機となる
- リモートワークにより移住促進や観光などに取り組む
- 若い人たちには、ウェブ環境を市で負担するなど、行政の支援が必要ではないか。高速道路により都市部から近い距離にあるので、一定の補助などがあれば若い人たちも来てくれるのではないか
- インバウンドにのみ頼ることの危険性をコロナが気付かせてくれた。東京の本社機能を群馬へ移転するなど企業誘致に力を入れることも1つの手段で

ある。観光の新たなスタイルの確立が必要である

- 老神温泉もインバウンドで打撃を受けた。群馬県の宿泊補助があっても老神温泉に来てくれる人は少ない
- コロナ禍で生活様式が一変した。野菜の価格は安定しているが、花や牛肉は売れ残っている。人口減少は厳しい問題であり、東京一極集中は止まらないと思う。生活様式の変化や学校の休校などもあり、今までの議論にコロナの件を付け加えていかなければならない。コロナ禍で企業倒産も多く、沼田の経済をどうやって立て直すのかということは大きな課題である。また、地域のコミュニティをしっかりと作っていく必要がある。農業後継者不足の問題や高齢化の問題、観光農園も大型バスが入る今までのようなスタイルはとれない。観光事業はとても厳しい
- 100年に1度の変化の時期。このタイミングで沼田流の生活方式を作り、定着させ、観光資源とする。無数の「点」で実施していたものをつないで「面」で対応。官民連携で持続可能な新しいものを作っていく。SDGsの視点を取り入れていったら良いのではないか
- 住み慣れた地域で地域完結というのが一番いい。沼田市の良さを数値化、見える化する。子どもたちが大学などに進学後、戻ってくるのは地域での活動に関わっている場合が多い。他でできない体験を通して戻って来てもらう
- 森林文化都市を念頭に置き、今までの沼田市を作ってきたのは高齢者。文化より実生活が先と言われがちであるが、人間は実生活だけでは生きていけない。文化も大切である
- この地域での新しい生活スタイルとして、農業基盤を強化する。衣食住の食を強化して、いざという時にこの地域内で自活できるようにする。50年、60年先の姿を考えて、災害に強い地域をつくる
- 人が戻り、人が集まる場所作りが必要。働く場所がなければ戻ってこられない。都会の密から自然豊かな沼田へ戻って来てもらう
- 農林業を推進して、若者たちが郷土に戻って仕事ができるような地域づくりが必要である
- 高齢化や少子化を一気に改善する策はない。コロナを良い機会ということもできるが、ワクチンや薬が開発されるため、2～3年後のことを考えて計画した方がよい。どうしたら元の生活に戻せるかを考えていくべきである
- 新しい生活スタイルを作るチャンス。新しい街づくりによってピンチをチャンスに変え、市民の皆さんに新しい生活スタイルを伝えていく。働く場所を

作れば若い人たちが戻ってきてくれるのではないかと思う

#### <アドバイザー>

これまでのあり方や見方を少し変えてみる取り組みから、新しい可能性が見えてきます。私たちにとって「幸せとは?」「本当の豊かさとは?」等を問う生活への見直しの議論が、静かに求められているからです。

コロナ禍は「カタチあるモノ」の世界から、愛や信頼や誠実という、人間の本質に宿る「カタチの無い」心の世界への重要性に気づかせてくれたのです。

子どもたちが豊かな自然とのふれあいを通して体験する教育は何物にも代えがたい人間形成にも効果的です。コロナは私たちにヒトとしての人間形成を第一義的に尊重する教育を、もう一度考え直してみる良い機会でもあるのです。

今回のコロナ禍は命の大切さについて警鐘を鳴らしました。これまでの社会を支えてきた価値観を大きく変えさせる出来事が始まったのです。

絆の重要性は東日本大震災が、阪神淡路大震災では都市整備のインフラについて、未来のエネルギー問題は原発のメルトダウンによって、各々考えさせられました。今回のコロナ禍は命の大切さや生き方を再考させる出来事となりました。再び、私たちが原点に立ち返って考える機会となっています。発言にありました可能な限り自己完結型の街にする地域コミュニティの再構築をこの機会に考え直す事も大切な視点ではないかと思えます。

#### <意見交換>

- ワクチン開発までと開発後で社会は違ってくる。ワクチンの実用化まではチャレンジの期間としてはどうか
- これからデジタル化が進むとアナログの良さが見直されてくる
- コロナによって全世界で40万人が死亡し、1千万人が感染している。世界規模で起きている大きな出来事で、ワクチンができたから元に戻すのはもったいない。新しい生活様式をどうしていくのかという議論が必要であり、重要となってくる
- 元の生活に戻るとは思っていない。色々な人が色々なアイデアを出して考えている。いずれは回復するがすぐにといいわけにはいかない。地産地消がコロナで進んだように感じている。直売所などの売り上げが伸びている。何か糸口があるのかもしれない。安心安全なものを求め、家庭で調理する人も増えたのではないか。方向性が見えるかもしれない
- SDGsを含めた新しい生活様式。社会を包括的に見られる人材育成をしていくことが必要と思う

## <アドバイザー>

A I や I O T が進む情報化社会の対極として「人間とは?」「幸福な人生とは何か?」と考えるようになると言われていています。その為には、今まで見失いがちだった沼田市の可能性の芽を引き出す目標設定が重要です。

2025年問題は高齢者の命に優しい地域づくりと、それを支える地域システムの構築が急がれているからです。

- ① インフラ整備の問題 人と人の支え合いのインフラも拠点作りとして避けて通れない課題解決が急がれます。
- ② Z o o m などリモートワークが進み、社会的ツールとして今後、ますます活用促進が進みますが、官民をあげて情報セキュリティの問題の個人情報などの取り扱いに関する議論がこれまで以上に必要で便利さの面だけに注力し進めると危険です。
- ③ 循環型社会の構築 地産地消だけではなく地球に優しいSDGsの視点からの点検が必要です。

## <副市長>

コロナをどうとらえるのかを通して、日本のITが世界に比べて遅れていることがわかりました。図らずも、日本がアナログで暮らしてきた実態が明らかになりました。韓国や台湾、中国では市民の位置情報まで管理されており、個人情報の取り扱いの問題もありますが、情報化を社会の安全・安心を守る観点からも進めないと危機対応が遅れることが、これらの国々の先行事例から示唆されました。都会ではリモートワークが主流となっています。

国としてマイナンバーカードと口座情報を紐付けするなど改善すべき点は多くありますが、群馬県ではデジタルトランスフォーメーションという組織を作り、新しい情報化社会に対応していく取り組みを立ち上げています。

密にならない安心感、開疎化、一極集中のデメリットを、コロナ問題を通して感じました。今後は持続可能な地方重視のSDGsの視点や安全安心の視点からの社会の見直しが進んでいく中、元に戻らない形で、篠田先生の①～③の視点を含めたコミュニティの取組を考えていくと良い提言に繋がると思います。

## <アドバイザー>

日本は国連の世界幸福度ランキング(18年3月14日、発表)では、世界156カ国中、54位でした。世界は日本の立ち遅れをこうした数字から見て取っています。

コロナ禍に苦しむ日本で、自然災害への危機回避のBCP（事業継続計画）【災害時など緊急事態が起きた際に損害を最小限にとどめ、早期復旧を可能とする平常時に行うべき活動や緊急時における事業継続のための方法、手段などを取り決めておく計画】が地域にも必要です。地域コミュニティ維持の為に、まさかに備える準備がこれまで以上に必要です。

これからの地域問題を考えていく際に、巨大化した自然災害の多発について、市民構想会議でもこの問題について議論しておく必要があると思います。

## 2) その他

- ・ 次回の会議日程について説明し、確認いただいた。追加資料等ある場合は事前に送付する

<第2回> 8月6日（木） 午後2時

- ・ クールビズ期間中（6月～9月）は、「ノーネクタイ、ノー上着」での対応をお願いした

(6) 閉 会（事務局：企画政策課長）